

平成21年度 名古屋大学大学院国際言語文化研究科 公開講座募集要項

主催：名古屋大学大学院国際言語文化研究科

言葉と文化の国際交流

国際交流とは歴史的に見て、文明の接触あるいは文明の移転・移植が行われる経路であり、この交流を契機として既存の文化は飛躍的な発展を遂げてきたといえます。本公開講座では、中国語・朝鮮韓国語・ロシア語・英語（米語）・独語・仏語・スペイン語・ポルトガル語の専門家が、それぞれの言語文化と日本との関係にからめて「国際文化交流」に関する話題を提供します。具体的には、翻訳・言語教育・映像などがテーマとなります。国際交流の過去の歴史を振り返りつつ、現代における新しい国際交流のあり方も紹介することで、急速な「国際化」の流れの中にある日本の現状と役割を問い直します。

第1回 6月10日(水)	開講式 大学院国際言語文化研究科長 前野 みち子 ■エズラ・パウンドの能と漢詩の翻訳とモダニズム キーワード：パウンド、フェノロサ、翻訳、モダニズム いわゆる「お雇い外国人」として日本で教鞭を執ったアーネスト・フェノロサは、滞在中、日本人の協力を得て、能の翻訳を試みた。彼はその完成を見ずに没したが、アメリカの若き詩人エズラ・パウンドがこれを完成させて、1916年に出版した。パウンドは、同じくフェノロサによる漢詩の訳稿をもとに、『キャセイ』という詩集も出版した。この講義では、フェノロサとパウンドによる翻訳を国際言語文化交流として捉え、また、それが新しい創作スタイルを生み出す経緯を見る。	長畑 明利
第2回 6月12日(金)	■ラファエル・ブリュトー編ポルトガル語・ラテン語辞典に見出される18世紀前半のヨーロッパにおける日本 キーワード：キリシタン、江戸時代、交易、ヨーロッパの日本理解 ラファエル・ブリュトー編ポルトガル語・ラテン語辞典に見出される18世紀前半のヨーロッパにおける日本カトリック司祭ラファエル・ブリュトー（1638-1734）によって編集された「ポルトガル語・ラテン語辞典」（1712-1728、コインブラおよびリスボンにおいて刊行）は単なる語学辞書というよりは、むしろ一つの大百科事典というべき5000ページを越える労作である。編纂者がインド宣教を積極的に行ったテアティノ修道会に所属していたことから、アジア地域の記述が豊富であり、日本についての記述も、情報源はキリシタン時代から江戸時代の従来「鎖国」と呼ばれて来た交易が厳しく統制されていた時期にまでおよぶ。多くは断片的な記述でありしばしば様々な誤解などもともなうものの、18世紀前半のヨーロッパ人が日本をいかにとらえていたかを垣間見ることができる。	水戸 博之
第3回 6月17日(水)	■地域文化からグローバルな文化へ？—ブレイス語の変容をめぐって— キーワード：ブルターニュ、フランス、地域語、マイノリティ、ナショナリズム、エスニシティ フランスのブルターニュ地方では歴史的にケルト系言語（ブレイス語）が話されてきた。近代国民国家が形成される過程で、共和国の言語はフランス語と定められ学習が義務化される一方で、ブレイス語の方は「劣った」言葉として虐げられ、公の場での使用が禁じられてきた。国家語の成立と地域語の抑圧は決してフランスに特殊な例でないことは、例えば沖縄の学校でも地域語の使用が禁じられ、ブルターニュと同じ罰（「罰札」）が与えられたことから窺い知ることができる。ブレイス語の復権の歴史を通じて、国民国家の支配的文化と周縁的文化との関係、さらにはグローバル化する世界の中でのマイノリティ文化の変容の問題を考えたい。	鶴巻 泉子
第4回 6月19日(金)	■台湾映画のなかの日本 キーワード：ポストコロニアル、ノスタルジア、台湾映画 音楽教育 2008年台湾で大ヒットした映画『海角七号』は、日本敗戦で引き裂かれた日本人教師と台湾人少女との、60年越しの想いを軸としている。台湾では映画賞を総ナメにし、大陸中国では「大毒草（反革命的）」と酷評されたこの映画が、意図的／無意識に描く日本へのノスタルジア、「親日感」をどう解釈できるだろうか？ 原住民、スペイン、ポルトガル、清朝、日本、そして国民党という台湾の多様な歴史的地層を踏まえ、台湾映画における日本の表象を通じて、日台文化交流の現在を考える。	星野 幸代
第5回 6月24日(水)	■中国と日本—『源氏物語』の漢訳を中心に、日中間の言葉と文化の国際交流を考える— キーワード：格段に多い『源氏物語』の漢訳、敬語、和歌、中国語の苦心 漢字文化圏に人が多いからか、英訳など他の外国語訳と比べれば、『源氏物語』の漢訳は格段に多い。『源氏物語』の千年紀にあたる二〇〇八年の十一月、上海訳文出版社から刊行された『新源氏物語』（田迎聖子著）をもカウントすれば、漢訳は新旧をあわせると、十種類前後になるが、中でも中国大陸の豊子愷による『源氏物語』訳と台湾の林文月によるそれが最も優れたものである。漢訳者たちの翻訳中に直面した難しさ、とそれを解決した際の楽しさを想起しつつ、新旧の『源氏物語』の漢訳を吟味すれば、日中間の言葉と文化の国際交流の必要性と重要性をより理解することになるのではないだろうか。	楊 曉文
第6回 6月26日(金)	■言葉の翻訳／文化の翻訳 キーワード：トランスレーション・スタディーズ、意味／解釈、記号間翻訳、翻訳可能性 1970年代までの翻訳研究には、文学的関心に基づく翻訳論と、言語学的関心に基づく翻訳理論があり、文学と言語学のいずれの場合にも翻訳は周縁的な領域とみなされていた。こうした状況に対して翻訳研究を独立した学問として認知を求める動きは、やがてトランスレーション・スタディーズという流れを形成していくことになる。本講義では、翻訳研究を単に言語学・文学的な分野に留まらず宗教・芸術を含む広範囲な文化史研究であると位置づけ、異文化を越えて意味の伝達が可能であるかどうかについて考える。	吉村 正和

第7回 7月1日(水)	<p>■未知なる言語との邂逅 キーワード：大黒屋光太夫、前野良沢(蘭化)、現代の言語調査</p> <p>未知なるX語のテキストを我々が理解し、解説することは可能であろうか。江戸時代における露西亜への漂流民・大黒屋光太夫と蘭学の「化け物」・前野良沢の二人の語学理解を中心として、この疑問に少しでも迫りたい。参考に私が行っている言語調査の方法も紹介したい。</p>	柳沢 民雄
第8回 7月3日(金)	<p>■ことわざで見る日本と韓国 キーワード：ことわざ、カルタ、コンピュータ、異文化、民衆の知恵</p> <p>日本と韓国は古くから互いに最も近い隣国として、同じ漢字文化圏に属する国として、深い関係を結んできた。それは様々な面に痕跡を残しているが、ことわざの観点から日韓両国の関係の一面に迫ってみたいと思う。また、ことわざを通じて日本と韓国の文化の類似点と相違点について新たな認識を持っていただきたい。</p>	鄭 芝淑
第9回 7月8日(水)	<p>■ドイツ近代演劇の改革と歌舞伎 キーワード：マックス・ダウテンダイ、歌舞伎、花道、「額縁舞台」vs.「造形舞台」、遠近法</p> <p>ドイツの詩人・作家であるマックス・ダウテンダイ(1868-1918)は、20世紀の初頭、二度日本に滞在した。その時の経験をもとにエッセイ「アジアの劇場を模範とした『造形舞台』」を書いている。この講義では、主にそのエッセイの内容を紹介し、彼が従来のドイツ近代演劇(額縁舞台)に対していかなる「新しい」演劇(造形舞台)を提唱したのか等を「花道」などの事例をもとに説明する。</p>	大庭 正春
第10回 7月10日(金)	<p>■外国語教育とインターネット キーワード：インターネット、英語教育、ウェブ、ブログ、学びあう共同体</p> <p>インターネットを利用した教育は1993年頃から活発になってきた。特に英語を外国語として教える人々の間では、貴重な学習環境として様々な試みがなされてきた。そのような試みに関わってきた一人として、外国語教育を中心としたインターネット利用の歴史と方法について解説する。また、外国語だけでなく異文化を学び他者と自分を知る場としても活用されてきた。学びあう共同体としてのインターネットの可能性についても議論する。</p>	尾関 修治
閉 講 式		大学院国際言語文化研究科長 前野 みち子

開催期間：6月10日(水) から7月10日(金) まで 毎週水・金曜日 全10回

開講時間：18:00～19:30

受講対象者：一般社会人、大学生、大学院生

募集人数：60名(先着順)

受講料：7,200円(募集要項に入っている「納入依頼書」により郵便局へ払込)

開催会場：名古屋大学 東山地区 文系総合館7階カンファレンスホール(会場案内図参照)

申込締切：5月28日(木) まで [必着]

申込方法：郵送に限ります。

受講希望の方は、募集要項に入っている「納入依頼書」により最寄りの郵便局で受講料をお支払い頂き、その受領証を、「受講票」の「払込受領書貼付欄」に貼り付けて下さい。(納入の際には、所定の手数料が必要となりますので、ご了承下さい。受講料が納入されていない場合は、受講は認められません。)[「受講申込書」に、氏名・年齢・住所・電話番号・職業を、「受講票」に氏名を明記の上、80円切手(返送料)を添えて郵便でお申し込み下さい。なお、封筒の表面左下に「公開講座受講申込」と朱書願います。[「受講申込書」の受付が受理された方には、受講番号を付した「受講票」を折り返し返送します。]

要項の請求：募集要項の必要な方は、名古屋大学文系教務課事務室(国際言語文化研究科)[場所：文系総合館1階]まで直接お越し頂くか、または、返信用封筒(80円切手貼付のこと)を同封の上、下記申込先まで請求して下さい。

申し込みと：名古屋大学文系教務課(国際言語文化研究科)

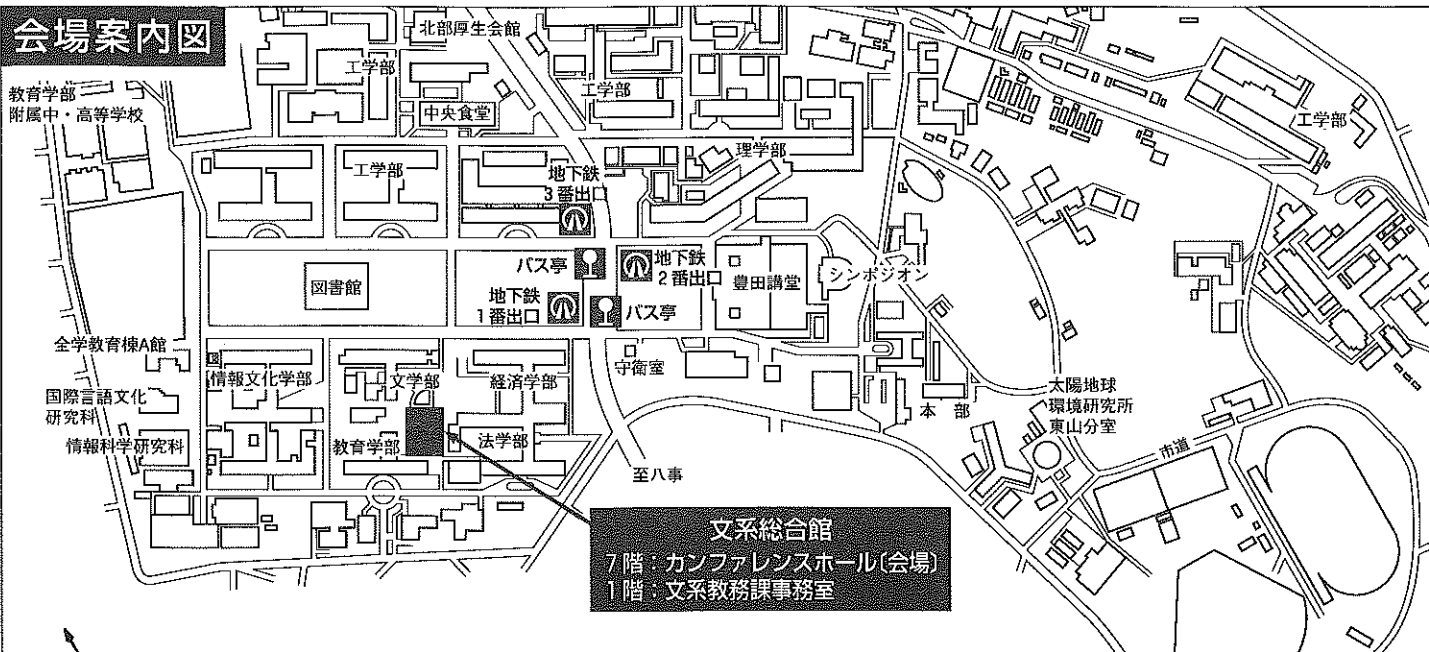
問い合わせ先 住所：〒464-8601 名古屋市中種区不老町 B4-5 (700)

TEL：052-789-5245 [AM9:00～PM5:00] FAX：052-789-4921

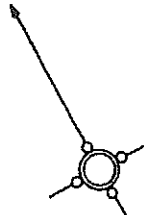
ホームページ：<http://www.lang.nagoya-u.ac.jp/events/2009/kokaikoza-2009.pdf>

「受講申込書」及び「受講票」に記載される個人情報、当公開講座を運営するに当たり必要な業務を行うために利用します。それ以外の目的のために利用、又は提供することはありません。また、これら個人情報の管理や利用は「名古屋大学個人情報保護規程」に基づき適正に取り扱います。


会場案内図




文系総合館
 7階: カンファレンスホール(会場)
 1階: 文系教務課事務局



〔地下鉄を利用〕

 地下鉄名城線「名古屋大学」駅下車
 (1番出口へ)

〔市営バスを利用〕

市営バスの系統・行き先				
	1	名駅17・名古屋大学行	5	八事11・名古屋大学行
	2	栄16・名古屋大学行	6	猪. 名・猪高車庫行
	3	栄17・名古屋大学行	7	猪. 名・妙見町行
	4	昭和巡回	いずれも「名古屋大学」下車	